

---

# とある宗派の会計係

カウベル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある宗派の会計係

### 【Nコード】

N56660

### 【作者名】

カウベル

### 【あらすじ】

天草式の、とある少年のお話。

## プロローグ（前書き）

この文章は「とある魔術の禁書目録」及び「とある科学の超電磁砲」  
（著：鎌池和馬）の二次創作となります。

以下注意事項です。

- ・この文章は、実在する宗教団体、学術機関、国家、書籍、魔導書等とは一切関係なく、それらを貶める意図もありません。
- ・「禁書」1～22巻、「超電磁砲」1～5巻までのネタばれがあります。
- ・リドヴィアは俺の嫁

以上に同意して頂ける方、暇潰しがてらに、ゆっくり読んでいってね。

## プロローグ

「ほら原城、さつさと立つのよな」

言葉より早く分厚い刃が落ちてくる。

もう絶対動けない、呼吸してもふいごのような音がするだけで全然楽にならない、いつそ心臓止まってくれと思っていたのに僕は腕と足を突っ張り飛び退いた。

うつ伏せから左の方に動いたのはそつちに香焼がぶっ倒れているのを知っていたからで、もちろん矛先というか剣先を其処に向けさせる為の行動だった。  
が。

「うわこつち来た!」

何故だ。ゆっくりあつちにトドメ刺してりゃいいのに。

「これは連携の稽古なのよな。仲間生け贄にすんのをチームプレーとは言わんぞコレ」

武道における掛かり稽古というものは、かかっていく側と受ける側が明確に分かれている。

特に受け側が上位の者であると掛かる側は常に相手のペースで攻めなければならぬので心身ともに疲労が早くなる。

今やっているのはつまりそういうものだけど僕と香焼二人相手にあっさり地面を舐めさせるこの人はちょっとおかしいと思う。

「おーら休んでたんじゃいつまでも終わらねえのよな。まあそうしたいってんならこつちは構わねえのよ」

言いながら右手に持ったバカでかい刃物を小枝みたいに振り回してくる。棒みたいになった手を動かさし、握った段平(だんびら)。要

するにデカい剣)で受け続ける、チュン、キュインと高い音も気にする余裕が無い。

と、建宮さんの後ろで香焼がゆっくり立ち上る。  
アイコンタクト。

よしいいぞこの人ぶっ殺せ。  
オーケー任せるすよ。

そろりと上がった手から短剣が放たれる。

僕に。

「なんでだバカ焼！」

「うるさい裏切り者！ 天罰食らえばいいすよ！」

その後、短剣にピッチャー返しを決めるもフランベルジュの腹で吹っ飛ばされ、稽古は三十分延長され、二人揃って一時間の説教を食らったのだった。

## プロローグ（後書き）

オリキャラ、ぶん殴られて終わる。

## 第一話

「次の巡礼には、自分絶対選ばれると思うんすよ」

熱のこもった香焼の言葉。それを聞いて僕は一つ頷くと、手にした紅茶の缶を飲み干して屑籠に放った。

缶の直径より一回り大きい穴に、音も無くすぼり。イエス。

ガツポーズしていたら強か殴られた。

「痛いなこの野郎」

「人の話聞いてないからすよ」

「聞いてたよ。おやつは経費じゃ落ちないって何度も言ってるだろ」

「ひとつつも聞いてないすね………ていうか前回は三百円までオーケーだって聞いてたんすけど」

「今回は日帰りだろ。人数も少ないし、おやつ食ってる暇なんて無いんじゃない？」

それとこれとは話が別すよ！ どうしてもって言うなら自己負担な。

この守銭奴！

「そうだな、それについては俺も聞きたいぞ原城」

地べたに寝転がりつつ騒いでいると、先輩がのっそり首を突っ込んできた。

今現在僕達がいるのは古びた、というより朽ちかけた茅吹き屋根の民家の庭で、天草式が九州のあちこちに確保している隠れ家の一つ。

何から隠れているのか、それは知らない。

「……牛深さん、酒代経費扱いにするのも無理ですって」  
「何だと!? 原城貴様、俺の魔王三合せしめといてどの口がそんなことを！」牛深さんのボディプレスをごろごろと転がって躲す。戦闘班の中でも体格ではトップのこの人にそんなもの食らっては漫画よろしくペラペラになる。あと暑苦しい。

「大体牛深さんの酒代、経費扱いにしてた方がおかしいでしょ。僕達万年金欠なのに、今までそれで罷り通ってたのが信じられませんよ」

どんなに小さなものでも、それが組織であるなら存在するだけで金がかかる。天草式の活動資金は基本的に一般信徒の寄付で賄われているが全国三万人ほどの信徒――ほとんど九州地方に集中しているけど――から集まるそれは常に組織を維持できる最低限のものであり、要するに芋焼酎にかけられる分などビタイチ存在しねえのである。

「いや飲まないでくれって言ってる訳じゃないんですよ、ほら、聖餐のときのワインとか。あれはどうですか？ 飲み放題ですよ」  
晩酌ぐらい好きなもん飲みたいんだよ！ 叫ぶ巨漢。

「何と言われましても無理なものは無理です。あ、五和姉さんのスリーサイズ調べてくれたら考えますよ？」

「なんとミッシヨン・インポッシブル！」

「少なくとも生還は無理臭いのよな」

建宮さんが現れた。

気づけば辺りは薄暗く、空気は肌寒い、汗で水をかぶった有様のシヤツが冷たく感じる。



「ま、その辺は俺がなんとかするのよな。だから原城、今回は大目に見てくれや」「……そうですね、分かりました。すみません牛深さん、少し神経質になってたみたいですよ」

「いや、こっちも勝手言ってたな。すまん」

ちよつと口籠もりつつ謝り返してくれる。やっぱり見かけに依らずいい人だ。

「さーて話まとまったところで飯なのよな！ 今日の当番は噂のその人、五和ちゃんよ」

「うわ楽しみだ、姉さん最近ぐんぐん腕上がってますし」

鼻がいい匂いにくすぐられる。空きつ腹が刺激されてぐるぐる鳴った。

腹減ったーと言いながら、建宮さんに目でフォーローに対しての感謝を伝えた。

いってことよな、と言うように笑い返される。

儉約も大切だけど、楽しみを奪ってもいけない。それなら他で節約出来るところを探してみよう。

天草式の会計係として、そのくらいはやってのけようじゃないか。

「それでおやつは？」

「それは駄目」

夕飯の大鍋いっぱいシチューは、瞬く間に空になった。

## 第一話（後書き）

しよっぱなから捏造設定満載でござるの巻

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5666o/>

---

とある宗派の会計係

2010年11月5日21時41分発行